

## トラーベ・アートフェスティバルに寄せて

トラーベ

ガラスの水面に 日の光  
光の下に 思い  
ひらめき ゆれて  
おりなすあい  
おりなすゆめ

(作曲 日本語詞 遠藤芳晴)

この歌をトラーベで出会ったすべての友人、  
そして僕とKYOUさんに家を提供してくれ、親のように接してくれた、  
マーゴットとハイナーに捧げる。

このフェスティバルに参加するにあたって、僕の予備知識はといえば、  
いろいろなアーティストが集まって、  
それぞれの作品をそれぞれの場所で製作するくらいでしかなかった。  
朝のミーティングの時、それぞれのアイデアを出しあったものの、  
僕にできることはただ歌って演奏することぐらいだ。  
他に何ができる？

でもそこでひらめいた。  
そうだ、こんなにたくさんアーティストが集まっているんだから、歌を作ろう。  
形に残らなくても、心に残ればいいじゃないか。  
すると、スコットランドから来たSu Griersonがすぐに、僕にひとつの詩をくれた。

Trave      Su Grierson

sunlight becoming glass  
a flowing membrane

ideas swim beneath  
the surface

sensations flitt the banks

like thread of 'ai'  
a loosely woven web.

この詩は、みんなでカヌーに乗ってトラベを下ったときの印象を綴ったものようだ。  
川下りに参加していない僕（早起きは苦手なのだ）のために、トーマスが解説してくれた。  
「ガラスのような水面に光が舞い、一瞬水底まで映し出す。  
緩やかに岸辺を舞っているのは、僕たちが見た青いトンボのことではないだろうか。  
君達も是非、カヌーの川下りを経験するべきだよ」  
しかし、僕たちはめまぐるしく過ぎる日々に、常に追われていた。

8月6日、7日のクストフェストの当日、僕とピアニストのKYOUは教会でコンサートを行った。  
アーネが通訳で協力してくれたこともあり、特に7日のコンサートはとても盛り上がった。

「僕の子供が生まれた時、子守歌を歌ってあげました。  
すると、そばでそれを聴いていた僕の母親が、  
「その歌はあなたがまだ小さかった頃、私が歌ってあげたのよ」  
と言いました。その時の彼女の表情は、愛に満ちていました。  
それは、ドイツの子守歌でした」

大合唱したブラームスの子守歌、  
僕のオリジナルの歌「dou dou」、「心の太陽あらわそう」（The Sun in my heart）など。  
言葉の違いを乗り越え、僕たちとドイツの人たちは愛を分かち合うことができた。

暖かさや友情、睡眠不足とリュウベック名物「マジパン」をもって、僕は日本に帰ってきた。  
ただ一つの心残りは、トラベ川の青いトンボを見るができなかったことだ。

日本の夏は暑い。  
僕の家は神奈川のはずれ、藤野の山の中にある。  
昨日、子供達と一緒に近くの川で遊んだ。  
すると、僕たちの目の前に、  
緑がかった青い胴体のトンボが現れ、すぐにまたひらひらと飛んでいったのだった。

みなさん、本当にありがとう。

2005年8月16日 芳晴 (Yoshiharu)